

■脳震盪などの危険を学ぶ。メディカルクリニック

北海道学生アメリカンフットボール連盟と北海道アメリカンフットボール協会主催のメディカル・クリニックが5月18日、道民活動センター（かでる2・7）で開かれた。道学連のアドバイザー・ドクターを務める神戸大医学部の星野祐一医師（北海道大アメフト部OB）が「アメリカンフットボール競技の安全対策」をテーマに、脳震盪や急性硬膜下血腫など頭部のけがの危険性と練習での注意点について講演した。

シーズンインを前に開かれる恒例のクリニックで、北海学園大、釧路公立大、北海道大、室蘭工業大、東京農業大、帯広畜産大、北海道科学大、北星学園大、札幌学院大の選手やスタッフ84人が参加したほか、リモートでも多数が講義に耳を傾けた。

星野医師は、昨年の外傷発生件数は関東で1試合平均1.5件、北海道で2.2件、ポジション別では関東で守備選手が多いが、北海道は攻守半々と前置きしたうえで、「脳震盪に加え、死亡率が30～40%と高い急性硬膜下血腫にも注意を」と呼びかけた。急性硬膜下血腫は2023、24年に全国で6例発生し、下級生や夏合宿、規模の小さなチームに起きやすいという。「集中力が無くなる脱水症状に気をつける。フルコンタクトを減らし、しっかり水分補給を」と訴えた。また脳震盪対策として「ヘッズアップタックル、首を鍛える、適正な防具を使う」という原則の徹底を指摘した。

メディカル・クリニックに続いて競技運営説明会と記録係講習会も行われ、学連競技運営担当理事の加納康寛理事と森竹俊仁記録委員がそれぞれ、注意点などを説明した。

